西ナイル方言における語順と語順の変化について

稗田　乃

0. 序

言語の語順はなぜ変化するのか，どのように変化するのか。この問題は様々な言語資料に基づいて研究されてきたが，その研究の多くは類型論的に整合的な語順，語順の変化を追求することであった。しかし，語順と語順の変化を考察することは統語論と統語論上の変化を考察することになる。語順の現象のみをとりだして議論することは正しい結論を導きださないであろう。本稿では語順の変化を統語論の中で，さらに語用論の枠内で議論する。なぜなら語順は統語的機能のほかに，より一層，語用的機能を果たしているからである（cf. Givón 1979, P. 83）。ある1つの言語あるいは言語群の語順の変化を考察することは，その言語に歴史資料がないなら，祖語の語順を再構成することに結びつく。つまり，祖語の統語論の一部を再構成することになる。統語論の再構成はそれだけで独立しているのではなく，形態論の再構成と密接に関連している。故に，語順の変化の研究は統語論，語用論とそれに関連する形態論が一体となって複雑な構成をとることになる。本稿はナイル語西方言に於ける語順の変化について議論する[1)]。そこで，第1章はナイル語西方言の語順を概観し，第2章ではその語順の統語的ならびに語用的機能を考察する。第3章では語順の通時的変化を考察する。第4章ではそれと関連する形態論に触れ，さらに，ナイル語東方言，南方言と比較して，ナイル語西方言の語順の特徴を明らかにする。

Greenberg（1963）以来，語順は様々に研究されてきた（cf. Vennemann 1973, 1974, 1975, Lehmann 1976, Mallinson & Blake 1981, Hawkins 1983）。ここでは語順の変化に主な興味を置くのだから，通時的に語順の変化を扱った議論だけを概観しておく。語順を変化させる要因として，大きく2つの要因が考えられる。外的要因（言語接触，借用など）と内的要因である。確かに，外的要因は語順の変化に大きな役割りを持つけれど，個別の言語あるいは言語群の語順の変化を外的要因で説明することは最小限にとどめなければならない。さて，従来の研究で語順の変化を説明するために4つの内的要因が提案された（cf. Hawkins 1983, P. 234, Andersen 1983, P. 83）。それは disambiguation, grammatical reanalysis, afterthought, perceptual ease である。

Vennemann（1973, 1975）は disambiguation を提案した。主語と目的語の格標示が失な

われた時，その弁別を補うためにSOVがSVOになる。格標示が失なわれた時，曖昧になった主語と目的語の弁別を語順の変化によって明確にすると説明する。しかし，これでは格標示を失うと同時に語順の変化が生じるという歴史的変化を想定していることになる。これは不自然である。むしろ，語順が変化したから格標示が失なわれたと考えるべきである。これだと，語順が変化し格標示も存在した中間段階を認めることができる。

Li & Thompson (1974) は grammatical reanalysis を提案した。中国語のSVOがSOVに変化したのはSVOVの構造から，Oに前置する動詞が格を標示する小詞として再解釈された結果だと説明する。

Hyman (1975) は afterthought を提案した。ニジェール・コンゴ語群で，文の最後に afterthought として何か句をつけ加えることがSOVをSVOに徐々に移行させた原因であると説明する。

Antinucci et al. (1979) は perceptual ease を提案した。SOV言語では名詞に前置される関係節は知覚上，困難を与える。この困難を軽くするために，関係節は名詞の後に移される。このNnRの語順がOV型からVO型への移行を促すと説明する。

これら4つの議論はそれ自体で語順の変化のあらゆる現象を包括的に説明する原理ではない。それぞれが統語論的な，語用論的な，また，知覚論的な異なる性格のものであることが示しているように，語順の変化は様々な要因によってもたらされる。本稿でも語順を変化させる要因の1つを提案する。

1．ナイル語西方言の語順

ナイル語西方言は統語的特徴から次のように分けられる。1) ルオ語，ランゴ語，アチョリ語，アルル語。2) シルク語，ジュル語，アニュアク語。3) ディンカ語，ヌエル語。

1) このグループの言語は形態論的受身文を持たない。

2) このグループの言語は形態論的受身文を持つ。又，不定動詞が必ず定動詞の直後に置かれる。

3) このグループの言語も形態論的受身文を持つ。又，不定動詞は文の末尾あるいは斜格の名詞句の直前の位置へ置かれる。

1) からはルオ語とランゴ語をとりあげる。2) からはシルク語を，3) からはディンカ語とヌエル語をとりあげて議論する。但し，必要な場合には他の言語も例に用いる。

西ナイル方言に属する各方言は必ずしも固定した語順を持つ言語ではない。それぞれの言語の内部で語順はかなり自由であり，又，それぞれの言語間で相違がある。しかし，語

順について，西ナイル方言の特徴がないわけではない。

(1) lócà òwòtò tú bòt dákô Lango (Noonan 1981 : 79)
man he-walk-perf. toward to woman
"The man walked toward the woman."

(2) dyànn à dwôŋ Lango (Noonan 1981 : 57)
cow att. part. big
"The big cow"

(3) gwôkk à lócà Lango (Noonan 1981 : 57)
dog att. part. man
"The man's dog"

(4) Okello rwot ma aneno Acooli (Culver 1970 : 47)
Okello chief rel. I-saw
"Okello is the chief whom I saw."

語順の特徴を整理すると次のようになる。

(1) Preposition-Noun, (2) Noun-Adjective, (3) Noun-Genitive, (4) Noun-Relative。西ナイル方言は前置詞言語であり，modifier はすべて head noun に後置される[2)]。これらは西ナイル方言に共通する特徴である。

次に，主語の位置を含めて動詞と目的語の位置について見てみよう。動詞と目的語の位置についての予測は Lehmann (1973) や Vennemann (1975) の Natural Serialization Principle では決して正しくなされてはいない。主語の位置に関しては Natural Serialization Principle では除外されているし，Greenberg (1963) や Hawkins (1983) で提案された語順の原理では主語の位置を予測することが不可能である。前置詞言語であろうと，NnAdj，NnG，NnR であろうと，VSO か SVO かは予測できない。実際，主語の位置については西ナイル方言の各言語間で様々な差異がある。

(5)		Luo Acooli Lango	Shilluk Jur Anuak	Dinka	Nuer
Main clause	Unmarked Tense	SVO (6)	SVO (12)	SVO (21)	VSO (28)
	Marked Tense	S Aux VO (7)	S (=O) Aux VA (13)	S Aux OV (22)	Aux SOV (29)
Affixation	Unmarked Tense	S pron.-V-O pron. (8)	S pron. VO (14)	Ind.-S pron. V	V-S pron. O (30)
	Marked Tense	S pron.-Aux-V-O pron.	S pron. Aux-V-A pron. (15)	S Aux-O pron. V (23) O Aux-S pron. V (24)	Aux-S pron. OV
Negative		SNVO (9)	S (=O) NVA (16) /SNVO (17)	SNOV (25)	NSOV (31) /VSN
Interrogative		SVO (10)	SVO (18) /S (=O) VA (19)	VSO (26)	VSO (32)
Dependent clause		SVO (11)	VSO (20)	VSO (27)	VSO (33)

(6) Achieŋ otiŋo dapi — Luo (Stafford 1967 : 4)

Achien he-pick-prog. water pot

"Achien is picking up a water pot."

(7) Nyiri abich ɔsɛkadhɔ penj — Luo (Stafford 1967 : 47)

girls five she-perf.-pass exam

"Five girls have passed the exam."

(8) akele — Luo (Stafford 1967 : 5)

I-bring-it

"I am bringing it."

(9) ɔnyangɔ ɔk sɔm kitabu — Luo (Stafford 1967 : 39)

Onyango Neg read book

"Onyango is not reading a book."

(10) dhakɔ achɪɛl nyalɔ kelo lewni adi ? — Luo (Stafford 1967 : 13)

woman one can to bring clothes how many

"Haw many dresses can one woman bring?"

(11) ……, nikech kɔth nɔsɪndɔgɪ — Luo (Stafford 1967 : 41)

because rain past it-prevent-them

"……, because the rain prevented them."

(12) ya naka dyel — Shilluk (Kohnen 1938 : 32)

I kill-acc. sheep

"I kill the sheep."

(13) ŋu anake ye en — Shilluk (Kohnen 1938 : 136)

lion past pass.-kill by him

"The lion has been killed by him."

(14) ya thala riŋo — Shilluk (Kohnen 1938 : 128)

I cook-acc. meat

"I cook the meat."

(15) apwota — Shilluk (Kohnen 1938 : 136)

past pass.-strike-by me

"He has been struck by me."

(16) ŋu pa naki wun — Shilluk (Kohnen 1938 : 148)

lion Neg. kill-by you

"The lion will not be killed by you."

(17) cɔllo pa nyimadho mogo ma gir — Shilluk (Kohnen 1938 : 148)

Shilluk Neg. cont.-drink beer rel. much

"Shilluk people do not drink much beer."

(18) yû denako dyel ? — Shilluk (Kohnen 1938 : 152)

you-fut. Int.-kill sheep

"Will you kill a sheep ? "

(19) dyel acami uthwon ? — Shilluk (Kohnen 1938 : 136)

sheep past pass.-eat-by hyena

"Did the hyena eat the sheep ? "

(20) ……, keny ade yudi yel — Shilluk (Kohnen 1938 : 137)

if past find-you durra

"……, if you had found durra."

(21) cɔk anäk ɣɛɛn — Dinka (Nebel 1948 : 42)

hunger Ind.-kill me

"Hunger kills me."

(22) bɛny aci wet lɛk kɔc Dinka (Nebel 1948 : 10)

chief Ind.-past order tell people

"The chief gave an order to the people."

(23) yin acaa kony apɛi Dinka (Nebel 1948 : 21)

you Ind.-past-me help very

"You have helped me very much."

(24) wamuth aca tiŋ Dinka (Nebel 1948 : 21)

your brother Ind.-past-I see

" I saw your brother."

(25) yin akec wet yic lueel Dinka (Nebel 1948 : 17)

you Ind.-Neg. past word true say

"You did not speak the truth."

(26) cak nyaŋ tiŋ wiir ? Dinka (Nebel 1948 : 21)

past-you (pl.) croco see in the river

"Have you seen a croco in the river ?"

(27) te thɛt kɔc yiin, …… Dinka (Nebel 1948 : 98)

if beat people you

"If the people beat you, ……

(28) det̤ chye̱k pi Nuer (Westermann 1912 : 104)

carry woman water

"The woman carries water."

(29) chè ńáṅ gàt kā̱f Nuer (Westermann 1912 : 109)

past croco man catch

"The croco has caught a man."

(30) pō̱ta t̤om Nuer (Westermann 1912 : 101)

play-I tom

"I play tom."

(31) kā yáṅ du kwal Nuer (Westermann 1912 : 102)

Neg.-I cow your steal

"I did not steal your cow."

(32) jɪn cɪ rwacdɪɛn lɪŋo ? Nuer (Huffman 1929 : 63)

you past their words hear-Int.

"Did you hear their words ?"

(33) ……, kan té kẹ' ma'ch Nuer (Westermann 1912 : 114)

if have they guns

"……, if they have guns."

(6) から (33) は西ナイル方言の各言語の語順を示している。(5) の表はそれらを整理したものである。主節，否定文，疑問文，従属節での語順と主語，目的語の接辞の位置をまとめた。主節については，その文が無標時制か有標時制かに従って，シルク語，ジュル語アニュアク語は異なるタイプの文を用いる。無標時制の文とは時制を表わす標識を持たない文であり，その時制は現在または実際の時間関係に関与しない時制である。有標時制の文とは時制を表わす標識を持つ文であり，その時制は標識の意味に従って未来であったり，過去であったり，完了であったりする。

(7) Nyiri abich ɔsɛkadhɔ penj Luo (Stafford 1967 : 47)

girls five they-past -pass exam

"Five girls have passed the exam."

(13) ŋu anake ye en Shilluk (Kohnen 1938 : 136)

lion past pass.-kill by him

"He killed the lion."

(7) では -sɛ- がルオ語の完了時制の標識であり，(13) では a- がシルク語の過去時制の標識である。シルク語では文が被動作主を持つ場合，無標時制の文は能動文に，有標時制の文は受動文になる[3)]。このために，主語と動詞と目的語の関係は表層と基底表示で一致しない。そこで，その受動文の語順を S (=O) AuxVA と記述した。カッコの中の O は基底表示での目的語を意味している。

ナイル語西方言では，助動詞と否定詞が動詞を起源にするから，それらを動詞として扱うと，基本的に SVO と VSO の語順を持つことになる。ヌエル語はあらゆるタイプの文で VSO の語順を持つ。ディンカ語は従属節と疑問文で VSO の語順を持つが，あとのタイプの文では SVO の語順を示している。シルク語，ジュル語，アニュアク語では従属節だけが VSO の語順を示す。ルオ語，アチョリ語，ランゴ語はすべてのタイプの文で SVO の語順を持つ。SVO の語順と VSO の語順の境界を (5) で 2 重線で示すことができる。

Givón (1977) や Vennemann (1973, 1975) では語順の変化はまず主節で起こり，従属節へと進んでゆくと議論された。一方，Dik (1980) は従属節が主節と必ずしも同じ語順のパターンをとることはなく，故に従属節の語順が主節の語順の古い状態を示すとは限らないと Givón (1977)，Vennemann (1973, 1975) を批判している。しかし，西ナイル方言の語順に関するかぎり，Givón (1977) と Vennemann (1973, 1975) の議論が支持できる。つまり，西ナイル方言は本来ＶＳＯの語順を持っており，後にＳＶＯの語順に変化したと考えられる。但し，ヌエル語は現在でもＶＳＯの語順を保持し，又，ディンカ語は従属節と疑問文でＶＳＯの語順を保っているが，他のタイプの文ではＳＶＯの語順になった。シルク語，ジュル語，アニュアク語では従属節だけがＶＳＯの語順を保持している。ルオ語，アチョリ語，ランゴ語ではすべてのタイプの文がＳＶＯの語順を持つようになった。だが，逆に西ナイル方言が本来ＳＶＯの語順を持ち，後にＶＳＯの語順に変化したと想定することも可能である。しかし，この想定では，まず従属節でＳＶＯからＶＳＯの変化が生じ，その変化は主節へと拡がったと考えなければならない。だが，語順の変化がまず従属節で起こったことを証明した議論は１つもない。語順の変化がまず従属節で生じると考えることは不自然である。なぜなら，語順は統語的機能のほかに語用的機能を持っているのだが，従属節ではその語用的機能を果たすことはほとんどない。つまり，従属節は語用論的には無標の文である。無標の文では語順は安定した状態にあると考えられる。有標の文で語順の変化が生じ，変化した語順が無標の文へと一般化される過程が想定できる。さて，西ナイル方言はＶＳＯの語順を持っていた。そして，主節でまずＶＳＯからＳＶＯへ変化した。なぜＶＳＯからＳＶＯへ変化したのか。どのように変化したのかを考える。

２．話題化と受動化

語順の通時的変化について考察する前に，共時的な語順の変化について考える。共時的に語順が変化する現象が通時的な語順の変化と関連していると考えるのは自然である。西ナイル方言には共時的に語順を変える規則として，話題化規則と受動化規則がある。

２．１．ルオ語、ランゴ語、アチョリ語

ルオ語，ランゴ語，アチョリ語には受身文は存在しない。これらの言語では受身文と等価な文として話題化文が用いられる。

(34) án kèc ànèkká túlwál Lango (Noonan 1981 : 52)
I hunger it-kill-me very much

"I am very hungry."

(34)では kèc "hunger"が主語であり，目的語 án"I"が話題化されている。話題化された名詞句はそれがもとあった場所に何らかの痕跡を残す。ここでは目的語接辞 -á "me"が痕跡である。目的語が話題化されたこの文は被動作主が話題化されている点で受動文と等価な文として用いられている。なぜなら，ルオ語，ランゴ語，アチョリ語では話題化された名詞句はそれ自体，文の主語のような性格を持つ(cf. Noonan & Bavin, 1978)。

(35) dákó ònénò lócà tɛ̀ jwàttò Lango (Noonan & Bavin 1978:130)
woman she-saw man and then hit (inf.)
"The woman saw the man and then she hit him."

(36) lócà dákó ònénò tɛ̀ jwáttó Lango (Noonan & Bavin 1978:130)
man woman she-saw and then hit (inf.)
"The man was seen by the woman and then he hit her."

(36)では，(35)の文に話題化規則を適用し，lócà "man"が話題化されている。不定詞 jwàttò "to hit"の主語は(35)では文の主語 dákó "woman"であるが，(36)では話題化された名詞句 lócà "man"である。このように，本来，主語が持つ統語的特性を話題化された名詞句は持つ[4]。話題化がルオ語，ランゴ語，アチョリ語では受動化と等価な機能を持つと考えられる。一方，これら以外のナイル語西方言の言語は受身文を持っている。

2.2. シルク語、ジュル語、アニュアク語

これらの言語の受身文では動作主を導く前置詞はそれに先行する動詞の末尾に付加され，さらに，縮小されることがある[5]。

(13) ŋu anake ye en Shilluk (Kohnen 1938:136)
lion past pass.-kill by him

(37) ŋu anaki en
lion past pass.-kill-by him

(38) ŋu anage
lion past pass.-kill-by him
"The lion has been killed by him"

第2章で少し触れたように，これらの言語では目的語つまり被動作主を持つ文は必

らず有標の時制では受動文にされるが，無標の時制ではこの受動化は義務的ではない。有標の時制では，この有標性を保証するためにTopic Shift が生じているのである。被動作主が話題化されることによって，有標の時制が明確にされるのである（cf. Givón, 1977, p. 240）。一方，無標の時制ではTopic Shift が生じず，動作主が普通，話題化される。

形態論的にも，有標の時制では受動文が能動文にとってかわっている理由がある。

(39) ya kwobo　　Shilluk（Kohnen 1938：134）
I report-pass.
"I am reported."

(40) ya pwot　　Shilluk（Kohnen 1938：135）
I-past pass. strike
"I have been struck."

動詞の受身形は動詞の末尾の子音を有声化することが特徴であるが，時制の標識が存在する場合，その標識に受身の要素が付加される。(40) では過去時制の標識は-a で，母音であるために有声化が起こらず，声調の変化だけが起こる。このように，受身形の特徴である末尾子音の有声化が見られないために，無標の時制の受身文との関連があまり強く意識されないのである。

シルク語，ジュル語，アニュアク語には話題化も存在する。

(41) dyel acam ye uthwon　　Shilluk（Kohnen 1938：136）
sheep past pass.-eat by hyena
"The sheep has been eaten by a hyena"

(42) uthwon dyel acame　　Shilluk（Kohnen 1938：136）
hyena sheep past pass.-eat-by her
"The hyena, the sheep was eaten by her."

(42) ではuthwon "hyena" が話題化されて文の先頭に位置している。この時，ランゴ語と同じく，話題化された名詞句の痕跡が動詞の末尾に-e "by her" として残されている。シルク語の話題化規則はランゴ語のそれと全く同じである。そして，話題化された名詞の占める位置は文の先頭である。話題化に関して，シルク語，ジュル語，アニュアク語とルオ語，ランゴ語，アチョリ語との間の相違はルオ語，ランゴ語，アチョリ語で話題化された名詞句が主語の特性の一部を共有するのに対して，シルク語，ジュル語，アニュア

ク語では主語の特性を話題化された名詞句にとってかわられることはないことである。

2．3．ディンカ語

(21) cɔk anäk ɣɛɛn Dinka (Nebel 1948 : 24)
hunger Ind.-kill me
"Hunger kills me."

(43) ɣɛn anɛk cɔk Dinka (Nebel 1948 : 24)
I Ind-kill-pass. hunger
"I am killed by hunger."

(44) ɣɛn acii cɔk nɔk Dinka (Nebel 1948 : 24)
I Ind.-perf. pass. hunger kill
"I have been killed by hunger."

(21) の文に受動化を行なった文が (43) であり，(43) の文を完了時制の文にしたのが(44) である。シルク語の受身文と較べて，ディンカ語の受身文の特徴は動詞（不定形）が時制を表わす助動詞と分離して動作主に後置されることである。シルク語では動詞（不定形）は必ず時制を表わす標識の直後の位置を占めている。能動文の場合でも，ディンカ語の動詞（不定形）は時制を表わす助動詞と分離して目的語の後の位置に置かれる。

(22) bɛny aci wet lɛk kɔc Dinka (Nebel 1948 : 10)
chief Ind.-past word tell people
"The chief gave an order to the people."

(22) で過去時制の助動詞 -ci の後には目的語 wet "word" があり，その後の位置に動詞（不定形）lɛk "tell" がくる。このように，助動詞と動詞（不定形）が分離することがディンカ語の文の特徴といえる。

ディンカ語の人称接辞の接辞の仕方には特徴がある。文が有標時制の場合，時制を表わす助動詞に人称接尾辞が付加される。この人称接尾辞は文の主語であっても目的語であってもよい。逆に言えば，1つのスロットに，ある時は，主語である人称接尾辞が埋められ，ある時は，目的語である人称接尾辞が埋められる。

(23) yin acaa kony apɛi Dinka (Nebel 1948 : 21)
you Ind.-past-me help very
"You have helped me very much."

(24) wamuth aca tiŋ Dinka (Nebel 1948 : 21)

your brother Ind.-past-I see

"I saw your brother."

(23)では人称接尾辞が占めるスロットに目的語 -aa "me" が埋められており，(24)では主語 -a "I" が埋められている。(23)のように目的語が人称接辞で，しかも，人称接尾辞が占めるスロットに埋められている時，文の先頭に位置するのはその文の主語である。一方，(24)のように主語が人称接辞で，人称接尾辞が占めるスロットに埋められている時，文の先頭にくるのはその文の目的語である。つまり，ディンカ語は文の先頭の位置，動詞の前の位置に何らかの名詞句を持つが，このスロットを占める名詞句は必ずしも主語ということはない。だから，ディンカ語の文タイプは(5)ではSAuxOVと表示したが，実際はそう単純ではない。文の先頭の位置は主語のスロットというよりは，むしろ，話題のスロットと考えられる。(24)の目的語が文の先頭にきている文は主語が人称接辞が占めるスロットに埋められたために，空になった話題のスロットに目的語，つまり，被動作主が義務的に話題化された文と考えられる。

シルク語，ジュル語，アニュアク語では有標時制の文は受動文でなければならなかった。これは時制の有標性を保証するために，被動作主が話題化された文である。これらの言語では有標時制の場合のみ，被動作主の一種の話題化である受身化が義務的に課せられる。

2．4．ヌエル語

ヌエル語の受動化と話題化をみてみよう。

(45) che ran mo̱kh nẹ̱kh

perf.-he man buffalo kill

"The man killed a buffalo."

(46) che mo̱kh nệ̱kh ke rān

perf.-he buffalo kill by man

"The buffalo was killed by the man."

(45)の文に受動化を行い，目的語 mo̱kh "buffalo" を主語にした文が(46)である。ヌエル語は第2章でみたようにVSO言語であり，そして，時制を表わす助動詞を持つ文の場合，助動詞は文の先頭に位置し，本動詞は助動詞と分離し主語や目的語の後に後置される。これはディンカ語と類似している。しかし，受身文の場合，ヌエル語はディンカ語が本動

詞を動作主に後置するのに対して，動詞（不定形）を動作主の前に置く。

ヌエル語の話題化は明確に受動化と区別できる。

(47) wan cɛ rwacdɪɛn lɪn Nuer (Huffman 1929 : 62)

Fox perf.-he words-their hear

"The fox heard their words."

(47) は主語 wan "fox" が話題化された文である。話題化された名詞は主語であれ，目的語であれ，すべて動詞の前に(47)では助動詞の前に，つまり，文の先頭におかれる。一方，ヌエル語の受動化された名詞句は動詞の後に，(46) では助動詞の後に置かれた。この事実から，もし被動作主が話題化される時，話題化された名詞句は受動化された被動作主名詞句とその文に於ける位置によって明確に区別される。一方，ヌエル語以外のディンカ語やシルク語などの西ナイル方言では受動化された名詞句と話題化された被動作主名詞句とを区別する特徴はヌエル語のそれほど明確なものは存在しない。

西ナイル方言の受動化と話題化を整理する。まず，受動化は次のように形式化できる。

(48)

Shilluk Jur Anuak	S Aux V O 1 2 3 4	→	S Aux-pass. V A 4 2 3 1
Dinka	S Aux O V 1 2 3 4	→	S Aux-pass. A V 3 2 1 4
Nuer	Aux S O V 1 2 3 4	→	Aux-pass. S V A 1 3 4 2

ルオ語，ランゴ語，アチョリ語は受動化を持たない。

西ナイル方言の話題化は次のように整理できる。

(49)

Lango Luo Acooli	S Aux V O 1 2 3 4	→	T S Aux V-trace 4 1 2 3
Shilluk Jur Anuak	S Aux-pass. V A 1 2 3 4	→	T S Aux-pass. V- trace 4 1 2 3

Nuer　　Aux S O V　→　T Aux−trace O V
　　1　2 3 4　　2　1　　3 4

ランゴ語，ルオ語，アチョリ語では目的語の話題化を形式化した。これらの言語では話題のスロットは文の先頭である。故に，SVOの文型の場合，主語はすでに話題のスロットに位置していることになる。したがって，この主語を話題化するためには，特殊な文型，分裂文を用いなければならない。ここでは分裂文については議論しない。シルク語，ジュル語，アニュアク語では有標時制の文は受身文であるから，受身文の動作主の話題化を形式化した。これらの言語でも話題のスロットは文の先頭であり，主語は話題のスロットに普通，位置している。一方，ヌエル語は文の先頭が話題のスロットであり，話題化されていない文はこのスロットが空である。故に，どんな要素でも話題化されて文の先頭に移動されることが可能である。ここでは主語の話題化を形式化した。

西ナイル方言のすべての言語で話題化の現象が存在し，話題のスロットは文の先頭である。又，ヌエル語を除く西ナイル方言では話題化を受けていない文はその主語がすでに話題のスロットの位置にある。

一方，動詞と助動詞の位置に関して，西ナイル方言は2つのグループに分かれる。ルオ語，ランゴ語，アチョリ語とシルク語，ジュル語，アニュアク語は動詞と助動詞が決っして他の名詞句によって分離されることのない言語であり，ヌエル語とディンカ語は動詞と助動詞の間に他の名詞句が入ることのできる言語である。故に，西ナイル祖語の文の構造を再構成するとなると，このどちらのタイプを再構成するか決定することは困難である。とりあえず，西ナイル祖語の時代にはこの2つのグループが方言として存在したと考えておく。

3．西ナイル方言の語順の変化

第1章で西ナイル祖語の語順は本来*VSOであったと考えた。又，第2章で，文が助動詞を持つ場合，助動詞と動詞とが決っして分離しない方言と助動詞と動詞の間に他の名詞句がきてもよい方言の2つのグループがあったと考えた。そこで，その各々の方言の語順は前者の方言は*Aux VSOであり，後者の方言は*Aux SOVであったと考えられる。

まず，有標時制の文，つまり，*Aux VSOか*Aux SOVの構造の語順の変化について考察する。*Aux SOVの言語をまず議論し，次に*Aux VSOの言語について議論する。

3．1．　Aux SOV言語 —ヌエル語、ディンカ語—

ヌエル語とディンカ語は*Aux SOVの言語である。さらに，話題のスロットを考慮すれ

ば，*(T) Aux SOVの構造を持つ。ヌエル語は現在でもこの構造を保持している。例えば，ヌエル語の受動化と話題化は次のようである。

(50) Passivization

(T) Aux SOV → (T) Aux−pass. SVA
1 2 3 4 5 1 2 4 5 3

(51) Topicalization

(T) Aux SOV → T Aux X V
1 2 3 4 5 [3/4] 2 [4/3] 5

受身文ではTのスロットは空でもよい。話題化では，$\underset{3}{S}$がTのスロットを埋めると$\underset{4}{O}$がXのスロットに位置し，$\underset{4}{O}$がTのスロットを埋めると$\underset{3}{S}$がXのスロットに位置する。この受身文と話題化文の具体例はそれぞれ，前章の(46)と(47)である。

一方，ディンカ語では何らかの名詞句が話題のスロットを必ず埋めていなければならないという変化が起こった。本来，語用論的規則であった話題化が統語論の一部にとりこまれるという通時的変化が生じたのである。

ディンカ語の受身文でその通時的変化を整理すると次のようになる。

(52) Proto Western Nilotic I　　Dinka

Topicalization

*(T) Aux SOV > S Aux OV
1 2 3 4 5　　3 2 4 5

Passivization　　Passivization

→*(T) Aux−pass. SAV > → S Aux−pass. AV
1 2 4 3 5　　4 2 3 5

ディンカ語の能動文と受動文は西ナイル祖語Iの能動文と受動文の(T)のスロットにSが義務的に埋め込まれた文となっている。この話題化が義務的になっていることは例文(23)と(24)を用いて2.3節で議論した。

3．2．*Aux VSO言語 ―シルク語、ジュル語、アニュアク語、ルオ語、ランゴ語、アチョリ語―

シルク語，ジュル語，アニュアク語は*Aux VSO言語である。話題のスロットを考慮すれば*(T) Aux VSOである。これらの言語でも，ディンカ語で起こった通時的変化と同じく，話題化が義務的に働くという変化が生じた。シルク語などの受身文を例にとり，この変化を考察する。

(53) Proto Western Nilotic II　　Shilluk etc.

Topicalization

*(T) Aux V S O　　>　　S Aux V O

1　2　3 4 5　　4　2　3 5

Passivization　　Passivization

→ *(T) Aux-pass. S V A　　>　→ S Aux-pass. V A

1　2　5 3 4　　5　2　3 4

西ナイル祖語IIの受身化文は主語が助動詞の後の位置にあると再構成しておく。この(53)の通時的変化もシルク語などの言語で西ナイル祖語IIの(T)のスロットに主語が義務的に埋め込まれたと容易に説明することが可能である。

ルオ語，ランゴ語，アチョリ語はシルク語などと同じ*Aux VSO言語である。しかし，ルオ語，ランゴ語，アチョリ語ではさらに助動詞と動詞が密接に結びついた構造を持つようになった。時制の標識が動詞に接辞されて，これらの間には決っしてどんな要素も介在できなくなったのである。この助動詞と動詞の関係をAux-Vと記述する。この通時的変化は次のようになる。

(54) Proto Western Nilotic II　　Proto Western Nilotic II′

*(T) Aux V S O　　>　*(T) Aux-V S O

この通時的変化が生じたために，(53)の西ナイル祖語IIの受身化はルオ語などでは適用されることは不可能になった。なぜなら，(53)の派生された西ナイル祖語IIの受身文は助動詞と動詞の間に主語が移動している。この移動は(54)の通時的変化によって阻止されるようになる。さて，それでは，ルオ語，ランゴ語，アチョリ語の受身化はどのようになるだろうか。

(55) Proto Western Nilotic II′　　Luo etc.

Topicalization

(T) Aux-V S O

1　2　3 4

Passivization

→*(T) Aux-V-pass. S A　　>　A Aux-V-pass. S

1　2　4 3　　3　2　4

ルオ語，ランゴ語などでは西ナイル祖語II′の主語が話題化されることは不可能になった。これは助動詞と動詞の関係が変化したためである。このことを説明するためにシルク語の受身文の派生をもう少し詳しく議論する。シルク語の受身文は西ナイル祖語IIの受身文

から，話題化を義務的に課すことによって派生される。この過程は次のように形式化できる。まず，西ナイル祖語Ⅱの能動文の句構造は(56)である。

(56)　$_3$〔 (T) $_2$〔 Aux $_1$〔 V S O 〕〕〕

受動化も話題化も西ナイル方言では左方への移動変形である。移動変形は内側の境界節点から行なわれる。

(57)　$_3$〔 $\underset{5}{(T)}$ $_2$〔 $\underset{4}{Aux}$ $_1$〔 $\underset{1}{V}$ $\underset{2}{S}$ $\underset{3}{O}$ 〕〕〕

Passivization (1)

→　$_3$〔 $\underset{5}{(T)}$ $_2$〔 $\underset{4}{Aux}$ $_1$〔 $\underset{1}{V\text{-pass.}}$ $\underset{3}{S}$ 〕 $\underset{2}{A}$ 〕〕

Passivization (2)

→　$_3$〔 $\underset{5}{(T)}$ $_2$〔 $\underset{4}{Aux\text{-pass.}}$ $\underset{3}{S}$ $\underset{1}{V}$ 〕 $\underset{2}{A}$ 〕

Topicalization

→　$_3$〔 $\underset{3}{S}$ $\underset{4}{Aux\text{-pass.}}$ $\underset{1}{V}$ $\underset{2}{A}$ 〕

まず，1の境界節点の内で移動が生じ，$\underset{3}{O}$は動詞の後の位置に移動し$\underset{3}{S}$となり，$\underset{2}{S}$は$\underset{2}{A}$となって $_1$〔 〕の境界節点の外へ出る。次に，受動化(2)が適用されるため，$\underset{3}{S}$は助動詞の直後へと移動する。最後に話題化によって$\underset{3}{S}$は(T)の位置へと移動する。

一方，ルオ語，ランゴ語などでは助動詞と動詞が結合してしまった。その結果，助動詞と動詞の間にはどんな要素も介在できない。そのために(57)の受動化(2)の移動変形は不可能となった。だが，話題化は義務的に課せられている。それ故，受動化(1)によって派生された構造に直接，話題化が適用される。この時，$\underset{3}{S}$を(T)の位置へと移動させることは2つの境界節点を越えて，要素を移動させることになる。このことは2つ以上の束縛節点を越えて，要素は移動できないという下接の条件を破ることになる。ゆえに$\underset{3}{S}$は(T)へと移動できない。一方，$\underset{2}{A}$が(T)へと移動するにはただ1つの境界節点 $_2$〔を越えるだけである。このために，義務的に適用されなければならない話題化は$\underset{2}{A}$に適用されたのである。ルオ語，ランゴ語などの派生は次のようになる。

(58) $_3[\ (T)_5\ _2[\ Aux_4\ _1\langle\ V_1\ S_2\ O_3\ ]]]$

Passivization (1)

→ $_3[\ (T)_5\ _2[\ Aux_4\ _1\langle\ V\text{-pass.}_1\ S_3\ ]\ A_2\ ]]$

Topicalization

→ $_3[\ A_2\ _2[\ Aux_4\ _1\langle\ V\text{-pass.}_1\ S_3\ ]]]$

ルオ語，ランゴ語，アチョリ語には受身文が存在しないことは前章で述べた。文の構造からみて，(58)の最終派生構造はルオ語，ランゴ語，アチョリ語での他動詞文の構造と一致する。ルオ語，ランゴ語などの他動詞文は本来の受身文から由来したと考える。(58)の最終派生構造が他動詞文と再解釈されたのである。

(59) *A Aux-V-pass. S > S Aux-V-tr. O

3．3．無標時制文 —西ナイル方言—

次に，無標時制の文について考察しよう。無標時制の文は西ナイル祖語では*VSOと再構成した。時制を表わす助動詞は存在しない。さらに話題のスロットは文の先頭に位置していたから，*(T) VSOと再構成できる。ヌエル語ではこの構造が保持されている。ディンカ語では話題化が統語規則として義務づけられた。主語が人称接辞で動詞に付加される時，目的語が話題化され，目的語が人称接辞で動詞に付加される時，主語が話題化される。この話題化については2.3節で(23)と(24)を例にして議論した。故に，ディンカ語の無標時制の語順は次のように変化した結果と考えられる。

(60) Proto Western Nilotic　　Dinka

*$(T)_1\ V_2\ S_3\ O_4$ > $T\ V\ X$

$[^3_4]\ _2[^4_3]$

話題化が義務づけられ，S_3が(T)に移動されるとXにはO_4が埋められる。O_4が(T)に移動されるとXにS_3が埋められる。

シルク語，ジュル語，アニュアク語でも話題化が義務づけられたが，有標時制の文の場合，有標時制を保証するためにTopic Shiftが生じた。このTopic Shiftにより被動作主が話題化されたが，この話題化の役割りを実際は受動化が行なった。シルク語などで

は有標時制では被動作主を持つ文は受動文である。このことは2.2節で議論した。しかし，無標時制ではTopic Shiftが生じず，一般的に，動作主名詞が話題となる。このために無標時制の文の場合，主語が(T)の位置に移動された。この移動は次のようになる。

(61) Proto Western Nilotic　　Shilluk etc.

*(T) V S O　　>　　S V−trace O
1　2 3 4　　3 2　　4

(62) ya nako ke／ka dyel　　Shilluk (Kohnen 1938 : 32)

I kill (intr.) sheep

"I kill a sheep"

(63) ya naka dyel　　Shilluk (Kohnen 1938 : 32)

I kill−acc. sheep

"I kill the sheep"

シルク語などでは自動詞形が動詞の基本形であり，他動詞形は自動詞形から派生される[6)]。(61)のV−traceが動詞の他動詞形の起源である。現在では他動詞文は被動作主が(63)のように，定名詞句であることを示すために用いられる。

ルオ語，ランゴ語，アチョリ語では助動詞と動詞が一体化する変化が生じた(cf. (54))。このために，有標時制の文と無標時制の文は文の構造に関して，違いがなくなってしまった。故に，有標時制で受身文から由来した他動詞文(cf. (58)と(59))からの類推によって，無標時制でもこの他動詞文が用いられるようになった。この他動詞文は既に動作主が話題になっているために，Topic Shiftが起こらない無標時制では一般に動作主が話題になることに違反することがなかった。

4. まとめ

この章では前章で再構成した文のタイプを形態論から簡単に傍証したい。

4. 1. シルク語、ジュル語、アニュアク語の受身形とルオ語、ランゴ語、アチョリ語の他動詞形

シルク語などの受身形は動詞語幹の末尾に位置する子音を，もしその子音が無声閉鎖子音ならば有声化して形成する。これについては2.2節で(39)と(40)を例にして議論した。ルオ語，ランゴ語などの他動詞文はシルク語などの受身文と対応し，西ナイル祖語II′の受身文から由来することを見た。実際，形態論的にもその事実は証明できる。

(64)	Qual.	Intr.	Tr.	Luo (Creider 1977a)
"make rot"	tópǒ		tòwò	
"be rotten"		tɔ̀p/tɔ̀w		
"treat"	thíéthǒ		thìèdhò	
"cook"	tétǒ		tèdò	
"put inside"	sócǒ		sɔ̀yɔ̀	
"divide"	pókǒ		pògò	

(65)			Luo (Creider 1977a)
"buy"	ŋíéwǒ/ŋíépǒ	ŋìɛ̀wɔ̀	
"pass gas"	kwódhǒ	kwɔ̀dhɔ̀	
"collect"	gúdǒ	gùdò	
"bark"	gúéyǒ	gùèyò	
"wet thoroughly"	dhíégǒ	dhìɛ̀gɔ̀	

(66)			Luo (Creider 1977a)
"speak in a foreign language"	dhùm	dhùmɔ̀	
"make accustomed to"	dhílǒ	dhìlò	

語幹が無声閉鎖子音で終わる時，他動詞形はその子音が有声化される(64)。有声閉鎖子音，鼻音，側面音で終わる時，その子音は有声化によって変化は受けない(65，66)。この他動詞形の形成はシルク語などの受身形と全く同じである[7)]。このように，ルオ語などの他動詞形とシルク語などの受身形は対応すると考える。

4．2．ナイル祖語 —*VSO言語—

最後に，ナイル諸語全体の中で西ナイル方言の語順の特徴を議論する。Heine (1976) はナイル祖語の語順は *SVOであり，ナイル語東方言と南方言で *SVOがVSOに変化したと考えた。しかし，彼が *SVOの根拠としている西ナイル方言はここで議論したように，本来 *VSOであった。故に，Heine (1976) の根拠は失なわれた。ナイル祖語は *VSOの語順を持っており，西ナイル方言のみ，その *VSOの語順をSVOに変えたのである。本稿では，西ナイル方言がどのように *VSOからSVOへ変えたかを論じた。では，南ナイル方言と東ナイル方言はなぜその語順をSVOに変えなかったのだろうか。南ナイル方言のキプシギス語では分裂文などの話題化文を除けば，文の末尾に話題のスロットがある。

(67) ka·pa·rci la·kwɛ́·t cɛ́·rɛ́·rɛ́·t Kipsikiis (Credier 1977b:333)

I－showed child baby

"I showed the baby to the chíld"

or "I showed the chíld to the baby"

(68) ka·pa·rci cɛ́·rɛ́·rɛ́·t la·kwɛ́·t Kipsikiis (Credier 1977b:333)

I－showed baby child

"I showed the báby to the child"

or "I showed the child to the báby"

(67)では cɛ́·rɛ́·rɛ́·t "baby" が，(68) では la·kwɛ́·t "child" が文の話題になっている。このように話題のスロットが文の末尾にある言語はVSOからSVOの語順の変化を起こさなかったのである。また，ヌエル語（ナイル語西方言）もVSOからSVOの変化を起こさなかった。ヌエル語では2.4節で議論したように，主語と話題は文に於ける位置によって明確に区別される。故に，話題が主語へと再解釈されなかった。

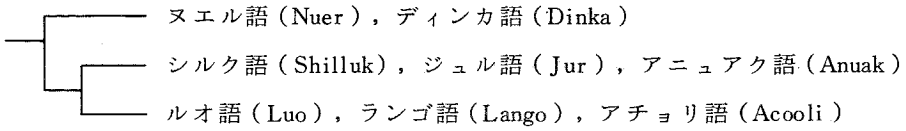
4．3．VSOからSVOへ

西ナイル方言は語順をVSOからSVOに変化させた。西ナイル方言は文の先頭に話題のスロットを持ち，話題化の規則が統語論の内部で義務的に適用されることになって，語順をVSOからSVOに変えたのである。一方，ナイル語東方言と南方言では話題のスロットが文末にあったため，この変化は起こらなかった。語順を変化させる要因は第1章で述べたように様々であるが，この語用規則を統語規則の中に取り込むことが語順を通時的に変化させる重要な要因であると考えられる。

注

A	: Agent	inf.	: infinitive	pron.	: pronoun
acc.	: accusative particle	Int.	: Interrogative	Qual.	: Qualitative
Adj	: Adjective	intr., Intr.	: Intransitive	R	: Relative
att. part.	: attributive particle	N, Neg.	: Negative	rel.	: relative
Aux	: Auxiliary	Nn	: Noun	S	: Subject
cont.	: continuative	O	: Object	sg.	: singular
fut.	: future	pass.	: passive	T	: Topic
G	: Genitive	perf.	: perfect	Tr.	: Transitive
Ind.	: Indicative	pl.	: plural	V	: Verb

1）西ナイル方言はスーダン南部からウガンダ，ケニア，タンザニア，ザイールにかけて話されている。その分類は次のように整理できる。



2）西ナイル方言はHawkins（1983）のPrepositional Noun Modifier Hierarchyに違反しない。Hawkins（1983）は前置詞言語か後置詞言語であるかが語順の類型論に重要な要素と考えている（cf. Hawkins 1983，P. 57）。しかし，Andersen（1983）は前置詞か後置詞かは，語順に関して2次的要素であると考えている。

3）ジュル語，アニュアク語に於いても，有標時制の文は受身文である。Buth（1981）はジュル語の受身文をOVSと分析している。Simeoni（1978）ではパリ語（アニュアク語の方言）の受身文を同様にOVSと分析している。このように分析すると，動詞は時制に従って異なる活用をすると分析することになる。又，有標時制の文は受身文を持たないことになる。パリ語の動詞の人称パラダイムはつぎのようになる。

present，sg.	1	a－twoca		present，sg.	1	a ki	twoyo
	2	i－twoca		pass.	2	i ki	twoyo
	3	yi－twoca			3	yi ki	twoyo
past，sg.	1	a－twoy－a					
	2	a－twoc－i					
	3	a－twoy－e					

現在時制では標識，a－，i－，yi－がそれぞれ，単数1人称，2人称，3人称を示しており，末尾の－aは目的語をとる場合，必要となる標識である。過去時制では－a，－i，－eが人称を表わす接尾辞である。本来は前置詞と人称接辞の縮約形に由来する。初頭のa－は過去時制の標識である。動詞語幹のtwoy/cは基本形であり，その受身形はtwoy，能動形はtwocである。過去時制では受身の標識は過去時制の標識の直後に置かれる。ここでは何も明示されていないが，声調によって受身と能動が区別されている。このちがいは過去の自動詞文は能動文であることから，これと上記された動詞のパラダイムを較べることによって分かる。

4）Noonan & Bavin（1978）はこれと含めて5つの話題化された名詞句が持つ主語が持つ

ような特性を述べている（cf. Noonan & Bavin, 1978. P. 135）

properties of "basic subjects" usurped by fronted NP :

1. coreference across sentences
2. coreference with subordinate clauses
3. control of switch reference
4. leftmost NP
5. ability to launch quantifiers

5）(38)の受身文はButh (1981), Simenoi (1978)がそれぞれ，ジュル語とパリ語の過去時制能動文と考えているOVS文と対応するシルク語の文である。(cf. 注3)

6）モンタギュ文法では他動詞は自動詞から派生される。Dowty (1982) を修正して，その規則を書けば次のようになる。

$F_1(\alpha, \beta) = \beta^\frown\alpha'$ where α' is the result of marking the verb in α to agree with β.

$F_2(\alpha, \beta) = \alpha + \mathrm{Tr}.\ \beta'$ where β' is the result of marking β with accusative case.

7）ランゴ語の他動詞形は有声化ではなく，語幹末子音の重複によって形成される。

	Qual.	Intr.	Tr.	
"play"	tùkò		tùkkò	(Noonan 1981)
"grind"	régô		règgò	(Okello 1975)
"see"		nên	nènnɔ̀	(Noonan 1981)
"to cause to cough"	ɔ́lɔ̂		ɔ̀llɔ̀	(Noonan 1981)

参考文献

Andersen, P. K. 1983 *Word order typology and comparatiue construction*, John Benjamins, Amsterdam.

Antinucci, F. et al. 1979 "Relative clause structure, relative clause perception, and the change from SOV to SVO.", *Cognition* 7, 145−176.

Buth, R. 1981 "Ergative word order—Luwo is OVS.", *Occasional papers in the study of Sudanese languages* 1, 74−90.

Crazzolara, J. P. 1938 *A study of the Acooli language*, Oxford U. P., London

Creider, C. A. 1977a *Luo lexicon*, London (Canada).

1977b "Functional sentence perspective in a verb initial language.", in P. Kotey and H. Der-Houssikian eds., *Language and linguistic problems in Africa*, 330-343, Hornbeam, Columbia.

Culver, G. O. 1970 *Relative constructions in Acholi*, Ph. D. dissertation, Univ. of Michigan.

Dik, S. C. 1980 *Studies in functional grammar*, Academic P., London.

Dowty, D. 1982 "Grammatical relations and Montague grammar.", in P. Jacobson and G. K. Pullum eds., *The nature of syntactic representation*, 79-130, Reidel, Dordrecht.

Givón, T. 1977 "The drift from VSO to SVO in Biblical Hebrew: the pragmatics of tense-aspect.", in C. N. Li ed., *Mechanisms of syntactic change*, 181-254, Texas P., Austin.

1979 *On understanding grammar*, Academic P., New York.

Greenberg, J. H. 1963 "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements", in J. H. Greenberg ed., *Universals of language*, 73-113, MIT, Cambridge.

Hawkins, J. A. 1979 "Implicational universals as predictors of word order change", *Language* 55, 618-648.

1983 *Word order universals*, Academic P., New York.

Heine, B. 1976 *A typology of African languages, based on the order of meaningful elements*, Dietrich Reimer, Berlin.

Huffman, R. 1929 *Nuer-English dictionary*, Dietrich Reimer, Berlin.

Hyman, L. M. 1975 "On the change from SVO to SVO: evidence from Niger-Congo.", in C. N. Li ed., *Word order and word order change*, Texas P., Austin.

Kohnen, B. 1938 *Grammar of Shilluk*, Missioni Africana, Verona.

Lehmann, W. P. 1973 "A structural principle of language and its implications", *Language* 49, 47-66.

1976 "From topic to subject in Indo-European", in C. N. Li ed.,

Subject and topic, Academic P., New York.

Li, C. N. and S. A. Thompson, 1974 "An explanation of word order change : SVO — SOV", *FL* 12, 201-214.

Mallinson, G. and B. J. Blake, 1981 Language typology, North-Holland, Amsterdam.

Nebel, P. A. 1948 *Dinka arammar*, Missioni Africane, Verona.

Noonan, M. P. 1981 *Lango syntax*, Ph. D. dissertation, UCLA.

Noonan, M. P. and E. Bavin, 1978 "The passive analog in Lango", *BLS* 4, 128-139.

Okello, B. J. 1975 *Some phonological and morphological processes in Lango*, Ph. D. dissertation, Indiana Univ.

Santandrea, S. 1946 *Grammatichetta Giur*, Missioni Africane, Verona.

Simeoni, A. 1978 *Pari : a Luo language of southern Sudan: Small grammar and vocabulary*, EMI, Bologna.

Vennemann, T. 1973 "Explanation in syntax", in J. P. Kimball ed., *Syntax and Semantics* 2, 1-50, Academic P., New York.

1974 "Topics, subjects, and word order : from SXV to SVX via TVX" in J. Andersen and C. Jones eds., *Historical linguistics* 1, 339-376, North-Holland, Amsterdam.

1975 "An explanation of drift", in C. N. Li ed., *Word order and word order change*, University of Texas P., Austin.

Westermann, D. 1912 "The Nuer language", *MSOS* 15, 84-141.